

祇園白川地区における都市形成と白川・琵琶湖疏水に関する研究

京都大学大学院	正会員	田中尚人
京都大学大学院	正会員	川崎雅史
京都大学大学院	学生員	守津真麻

1. 研究の目的

京都白川沿川の祇園白川地区は近世以来の町並みをよく残し、昔ながらの京都の風情をよく残す場所として知られる。本研究では、当地区の都市形成には白川ばかりでなく、近代に建設された運河である琵琶湖疏水も白川を介して大きな役割を果たしてきたことを明らかにした。明治期に建設された琵琶湖疏水は、舟運、水力利用、灌漑等を主目的とした多目的開発であったが、当地区においては白川の流量を安定させる等、主に治水面の機能を発揮した。

2. 近世以前の祇園白川地区の都市形成と白川

(1) 白川派川と本川

中古の白川本川は、図-1 に示すように三条通りの北方を東西に流れ鴨川に流入していた。そして白川派川（小川）が現在の平安神宮の大鳥居の辺から南西に向かい、知恩院門前町より鴨川に流れていた。しかし、近世になると本川だった白川本川が断絶し派川であった小川が本川化した。

(2) 寛文築堤と祇園白川地区

江戸期に入ると、寛文年間に鴨川兩岸に上賀茂から五条に至るまでの「寛文新堤」が築かれた。この寛文新堤の特長は、築堤により川幅が固定され河原と市街地が明確に区別されたこと、鴨川右岸だけでなく左岸にも築堤されたことが挙げられ、この結果洛中だけでなく鴨川の東、洛外の都市的な発展が進んだ。祇園白川地区では、1670 年（寛文 10）には祇園外六町、1713 年（正徳 3）には祇園内六町が開かれ、外六町と内六町をあわせて祇園新地と呼び大いに繁栄した。祇園新地では、図-2 のように水路網が張り巡らされ、白川から引き入れた水をできるだけ長く都市内に滞留させるシステムが作られ、白川に依存した景観が形成された。

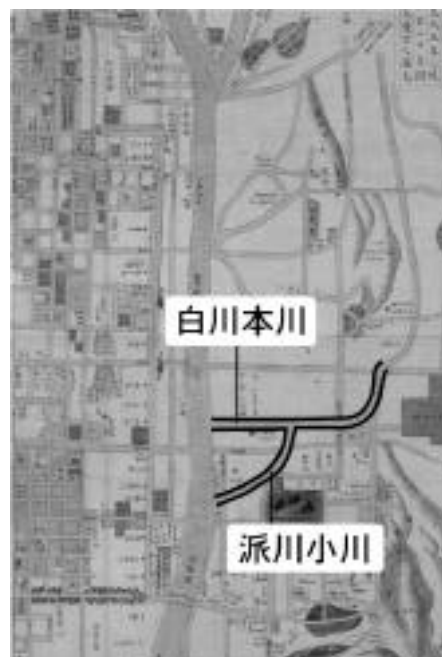


図-1 白川本川と派川小川（『中昔京師地図』より）

3. 琵琶湖疏水開削と祇園白川地区

(1) 第一琵琶湖疏水と白川の治水

1890 年（明治 23）田邊朔郎の設計により滋賀県琵琶湖から京都府への通水を実現した琵琶湖疏水が完成した。鴨東運河建設により、図-3 に示すように祇園白川地区に琵琶湖疏水が挿入され白川は南禅寺舟溜で一度鴨東運河と合流し、500m西の慶流橋付近にて分流、祇園白川地区を流れた後、四条通北で再び鴨川運河に合流した。琵琶湖疏水は他の地域では河川と交差することはあっても合流することはなかった。



図-2 祇園白川地区の水路網（『祇園町絵図』より）

鴨東の地で白川と交差した理由としては、合流地点となる南禅寺舟溜が沈砂ダムとしての機能を期待されたこと、堰を用いて分流することで白川下流部の流量コントロールが可能となったこと、が考えられる。琵琶湖疏水完成後、白川の流量コントロールは強化され、古来から祇園白川地区において実践されてきた白川の水に依存した生活様式や景観は保持された。

(2) 第二琵琶湖疏水と増水問題

明治後期から大正にかけての京都の急激な都市化を支えた、いわゆる明治の「三大事業」の先駆けとして発電と水道源の確保に最重点がおかれた第二琵琶湖疏水は、1905 年（明治 38）9 月 1 日に計画決定され、工事は翌 1906 年（明治 39）に起工された。第二疏水建設に伴う増加流量により、蹴上以西の琵琶湖疏水下流域では増加する水量の対処方法が問題になった。

当初は鴨川に放流される予定であったが、鴨川の洪水に対する懸念のため回避された。次に考えられたのが白川を経由し、大和大路四条付近から管渠にして五条通北で鴨川運河に合流させるものであったがこれも回避された。この理由として、増加流量による白川の洪水の危険性や、白川のせせらぎによってつくられた祇園白川地区の景観を損なうことが考慮されたことが推測される。最終的に、鴨東・鴨川両運河の拡幅と夷川舟溜からの白川放水路建設により増加流量は処理されることになった。



図-3 白川と琵琶湖疏水の接続

4. 昭和 10 年「鴨川大洪水」と白川・琵琶湖疏水

(1) 被害状況

1935 年（昭和 10）6 月に鴨川大洪水が起き、京都市内を流れる高野川、岩倉川、堀川、白川、天神川が氾濫した。この年の 8 月にも再び洪水が起き、相当な被害が出た。図-4 はこのときの被害状況図であるが、この図より、南禅寺以北の白川流域では、堤防の決壊や、道路、橋梁の被害が起きているのに対し、琵琶湖疏水から分流した白川下流域の祇園白川地区では被害は比較的小さかったことが分かり、琵琶湖疏水による白川の流量コントロールが上手く機能していたことが実証されている。しかし、大和大路四条周辺では鴨川からの背水が鴨川運河に浸入し、白川を遡上したために浸水被害がおきた。これは白川と鴨川運河との接続方法に問題があったと考えられる。

(2) 鴨川大洪水後の白川・琵琶湖疏水の変化

この鴨川大洪水の復興計画では、鴨川大改修計画をはじめとする改修計画は単に個別的な治水対策ではなく、工業地帯の設定、産業・交通網の整備と振興、都市構造の計画的再編成という観点から取り組まねばならないとする「大京都振興計画」に結びついた。京阪電鉄地下化、鴨川運河暗渠化などの計画が生まれたが、戦時体制が強化され事実上凍結された。現在、1988 年（昭和 63）の鴨川運河暗渠化後、白川はこの暗渠化された鴨川運河のさらに下を流れ鴨川に直接放流されることとなり、前述の接続に関する課題は解決された。

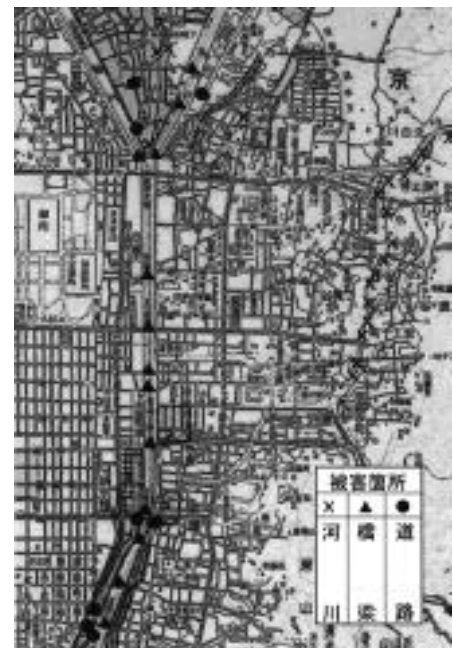


図-4 鴨川大洪水の被害状況（『鴨川水害誌』より）

5. 結論

近代に入り建設されたインフラストラクチャーである琵琶湖疏水は、祇園白川地区を直接流れることは無いが白川の流量をコントロールすることで、古来から白川の水に依存してきた当地区の治水、利水、親水に貢献し、景観形成を含む都市形成に寄与してきたといえる。